THE PRESS ザ・プレス 国際高

発行所
富山市願海寺水口444番地
富山国際大学付属高等学校
新聞部
ホームページアドレス：http://www.tuins-h.ed.jp
印刷所　北日本印刷株式会社

特集　2年生 研修旅行　海外4・国内2コース

# 全コースで貴重な体験

## 異文化を学び意識改革

2年生は12月、海外4コース、国内2コースに分かれて研修旅行に出かけた。今回のコースと参加人数は、海外がアメリカ15人、オーストラリア33人、シンガポール43人、タイ・カンボジア18人、国内は島根・大阪67人、沖縄15人。

2年生は、研修旅行に向けてESDにも関連づけた事前学習に取り組んでから出かけた。新聞部では旅行後の2年生に、意識の変化などを調査した。

あわせて、毎年恒例、各コースに参加した新聞部員（＋α）による紀行文と写真も掲載する。

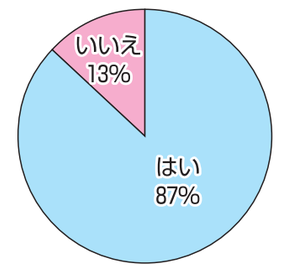
今回の研修旅行では、海外コースを選択した生徒が57％を占めた。

「実際に現地を訪れて学んだことは何ですか」という質問に対して多かった回答は、島根・大阪「鳥取砂丘が広かった」、沖縄「人の力はすごいと感じた」、アメリカ「日本とアメリカの高校の違い」、オーストラリア「自分の英語力」、シンガポール「水の大切さ」、タイ・カンボジア「いろんな人との出会い」だった。実際に現地に行き、目で見ることで新しい発見ができた人が多かったようだ。

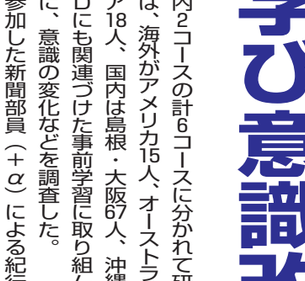
次に、海外へ行った生徒にした「旅行先で英語の必要性を感じましたか」という質問に対し、76％の生徒が「はい」と答えた。「ものを買う時」や、「現地の人とコミュニケーションをとるとき」などが多く挙がった。伝えたいことをうまく伝えることができず悔しい思いをした人が多かったようだ。特に、ホームステイを経験した生徒は、相手が何を言っているのかなかなか聞き取れなかったり、言い表せなかったりと苦戦することが多かったようだ。しかし、この経験を機会に、「英語の勉強をもっと頑張りたい」という意識改革につながった生徒もいた。

今回の研修旅行は、各コースで他国や日本の文化を様々な視点から学び、貴重な体験ができた生徒が多かったようだ。【高島拓馬】

Q．もう一度研修旅行先に行きたいか




Q．研修旅行先で英語の必要性を感じましたか




アメリカ

## ホストファミリーと満喫

姉妹校・チェスタートン高校の日本語クラスで現地の生徒達と

私たちアメリカコースは、他のコースよりも早く富山を出発し、13日間の旅を楽しんだ。

富山よりも寒い朝のオヘア空港に到着。空港では、私たちが訪れるチェスタートン高校で日本語を教えている津川先生が出迎えてくれ、生徒が実際に使っているスクールバスで高校へ向かった。到着後は、高校を案内してもらった。

学校の規則について学んだ後、ホストファミリーと対面し、約10日間のホームステイ生活が始まった。多くの生徒は期待感を持ちながらも、言語の壁に対する不安感も抱いていた。

学校は朝7時40分に始まり、午後2時45分に授業が終わる。授業時間は90分で、4コマあった。また、アメリカには日本と違ってクラスがなく、授業に関しても生徒自身が科目を選択するなど、日本とは全く異なり驚いた。また、7分間の休憩時間内に教室を毎回移動しなければいけないため、最初は苦労した。約7日間、学校の授業で多くの先生や生徒と接し、食堂でホストブラザーとその友達と一緒にご飯を食べるなど、とても楽しめた。また、クリスマスケーキをデコレーションしたり、日本の文化について発表したりし、けん玉や切り紙などにアメリカの生徒は興味津々だった。ホストファミリーとの休日は、多くの生徒がシカゴやアウトレットに行くなど、大変楽しい時間を過ごしたようだった。ホストファミリーとの別れの日には涙を流す生徒もいた。

別れを惜しみながらスクールバスで向かったシカゴでは、ウイリスタワー、ネイビー・ピアを訪れた。ウイリスタワーからのシカゴの風景に多くの生徒が感動していた。その後の自由行動では、多くの生徒がショッピングやトランプタワーを見学するなど、最終日を満喫した。

初めてホームステイを経験する生徒は不安などもあったが、ホストファミリーやチェスタートン高校の皆さんのお陰で多くの成長をすることができた。今後もホストファミリーとの友好関係を継続させていきたい。【高島拓馬】

シンガポール

## 経済成長感じる

姉妹校・ヒルズカレッジの校舎前で

シンガポールに着いて1日目は、B&Pプログラムで現地大学生と英語を使って交流した。なかなか言いたいことが伝わらない時もあったが、友達と協力しながら、自分の意見を伝えることができた。その後、マーライオンやマリーナベイサンズなどの市内の有名な名所を観光した。屋上から見た景色はとても素晴らしく、シンガポールの経済成長を身をもって感じることができた。

2日目は、バスに乗ってマレーシアに行った。各班に分かれて現地の民族衣装を着たり、現地の遊びを体験したり、マレーシアの生活を感じることができた。実際に異国文化に触れることができ、良い経験となった。また、国境をバスで越えるという貴重な体験もできた。

3日目は、ユニバーサルスタジオシンガポールに行った。日本にはないアトラクションにたくさん乗ることができた。また、その日にスコールが起き、日本とは全く異なる気候の違いを感じた。夜は動物園に移動し、ナイトサファリで迫力ある動物たちの姿を近い距離から見学した。

この研修旅行を通して、たくさんのことを学ぶことができた。特に水の大切さを感じた。現地の水はコカ・コーラより値段が高く、日本の衛生環境がとても良いことを改めて知った。また機会があれば友達とシンガポールを訪れたいと思った。【R・M】

オーストラリア

## 異文化に目輝く

現地での1日目は、ヒルズ学園でホストファミリーと対面し、それぞれの家に向かった。ほとんどの生徒がホームステイをするのが初めてということで、とても緊張していた。

2日目は休日で、ホストファミリーにマーケットや海などに連れて行ってもらった。マーケットではたくさんの人が衣類や地元のフルーツなどを売っており、石鹸屋、キャンドル屋と珍しい店もあるため多くの人で賑わっていた。午後には、ホストファザーの音楽教室にお邪魔してスティールパンという楽器を演奏してもらったり、日本ではなかなか体験できないようなことをさせてもらうことができた。

3日目と5日目は、ヒルズ学園で英語の授業を受けた。2時間目の後にティータイムという日本にはない休憩時間が設けられ、各自でホストファミリーからもらってきた食べ物や飲み物を談笑しながら食べた。授業では、英語だけではなくオーストラリアのハンドゲームを教えてもらったり、映画を英語のみで観たり、洋楽を教えてもらい全員で歌ったりした。

4日目は、ブリスベン観光をしに各所を回った。はじめにブリスベンが一望できるコーサ山の展望台に行った。私たちが行った日は天気も良く、街全体を見ることができた。次に博物館を訪れた。現地に生息している動物、昆虫などのレプリカやオーストラリアの歴史について紹介されており、戦車や旗など貴重なものが展示されていた。そのあと、クイーンズランドストリートモールへ行った。土産屋やカフェなどが連なり、生徒達は目を輝かせながらショッピングを楽しんでいた。【高野和】

タイ
カンボジア

## 現地の学校と交流

カンボジアのアンコールワットで

1日目は、中部国際空港からタイ航空で約6時間かけ、スワンナプーム国際空港まで向かった。しかし、空港からバンコクまで大渋滞の影響で約1時間半かかった。タイは日本よりも街が発展しているように感じた。また、セブンイレブンやファミリーマートがたくさん見られた。夕食には、タイ王国の鍋料理であるタイスキを食べた。日本でいう寄せ鍋のようなもので「ヘルシーでさっぱりしてとても美味しかった」という声が多かった。

2日目には、シーアユタヤ学校と交流した。日本、富山についてプレゼンし、タイの伝統の踊りについて教わるなど、友好関係を築くことができた。その後、エメラルド寺院と涅槃寺を訪れた。エメラルド寺院では黄金の仏塔を、涅槃寺では涅槃仏とワット・ポーを見学した。多くの生徒は涅槃仏の大きさに驚いていた。

3日目は、タイからカンボジアに移動した。アプサラダンスという9世紀に生まれた宮廷舞踊の一つを鑑賞した。大変きらびやかで、興味深いものだった。

最終日は、アンコールワットで朝日を鑑賞した。ホテルに戻り朝食をとった後、アンコールワット、アンコールトム、タプローム遺跡群を訪れた。どれも日本では見られない、幻想的で時代を感じるものが多かった。

日本と文化や言語の違いはもちろん、子ども達が朝早くから働いている現状を見て、改めて自分の親に感謝の気持ちを覚えた。今回の経験はとても良い機会になったので、また訪れたいと思った。【KK】

島根
大阪

## 行く先々で新しい発見

1日目は、鳥取砂丘に行った。海岸線が一望できる360度の大パノラマが広がっており、砂丘の最高峰「馬の背」からの美しい日本海の眺めに感動した。

2日目は島根に移動し、都市景観100選にも選ばれている国宝松江城を見学した。そして足立美術館を訪れた。庭園は手入れや清掃が毎日行われ絵画のように美しかった。

3日目は、世界遺産石見銀山を訪れた。世界遺産センターで歴史を学んだ後、丁銀作りを体験した。また、現地ガイド案内のもと電動自転車に乗って豊かな自然の中を巡り、国内外の歴史に重要な役割を果たした銀山を肌で感じた。そして、国内最大級の注連縄で有名な出雲大社に行った。歴史ある社殿で祈祷をしてもらい、幸せを呼ぶとされる「2礼・4拍手・1礼」の作法で祈りを込めた。

4日目は、日本で最初に世界文化遺産に登録された姫路城に行った。築城から400年以上が経過した今でも、見るものを引きつける城に生徒たちは魅了されていた。午後は大阪にあるEnglish Village で日頃の英語学習の成果を確かめた。

最終日はユニバーサルスタジオ・ジャパンを訪れ、これまでの研修の疲れを絶叫に乗せて吹き飛ばした。【高田和輝】

→出雲大社の巨大な注連縄の前で

→セントーサ島のマーライオン像の前で



沖縄

## 生活の違い実感

研修1日目は移動で時間がかかり、あまり沖縄の景色などを楽しむことができなかった。しかし、夜ご飯に現地の食材を使った料理を楽しんだ。

2日目は、沖縄県平和祈念資料館で悲惨な映像や写真などを見て、戦争についての関心が深まった。その後、沖縄県北部にある伊江島で2日間の民泊が始まった。沖縄には川が少ないため節水が心がけられていて、同じ日本国内でも生活の違いを感じた。また、家の近くには米軍の施設があり飛行機の音がよく聞こえ、沖縄県民の多くが怯える気持ちを理解することができた。

民泊後には、首里城や美ら海水族館など、多くの観光地を訪れた。首里城は独特な様式が取り入れられており、私たちを圧倒させるような素晴らしい建物だった。また、美ら海水族館では巨大な水槽で泳ぐジンベイザメの姿が圧巻だった。

この5日間、とても充実した研修旅行となった。【MK】

首里城正殿の前で

## かざぐるま

平成最後のお正月を迎え、春には新しい元号となることを誰もが楽しみにしている。しかしそんな空気の中で、新年早々うれしくない話題がニュースで流れ、耳にした人も多いだろう。平成を代表するアイドルAKB48の姉妹グループ、NGT48のメンバーがファンの男性から暴行を受けたと発表した事件だ★これが最初に世間に公表されたのは、新聞やテレビなどの報道番組ではなく本人のTwitterだった。SNSでの本人のつぶやきは多くの人に衝撃を与え、メンバーどうしの不仲説や行き過ぎた競争心など、いろいろな憶測を招くこととなった。そして最終的に謝罪したのは被害者であるはずの山口真帆さん自身という、どうにも腑に落ちない決着を迎えた。そもそも暴行騒動を起こしたファンが、メンバーが個々につぶやいていたSNSからメンバー達の帰宅時間や行動を推測して起こした事件だったようだ。ファンに対するメンバー達の心遣いを逆手に取ったこの事件。いつでもどこからでも誰もが手軽に利用できるSNSの存在が、今回の事件を招いたと言っても過言ではない★この事件から、SNSの正しい使い方について考えさせられることは多い。情報化によって、今後はますますスピーディで身近な情報を求められる社会となるだろう。だからこそ、自分の身辺情報や個人情報を含む内容を発信する時には細心の注意が必要となる。また、このような事件があったにも関わらず、NGT48の事務所は本人に防犯ブザーを持たせただけ、という対応はいかがなものか。本来ならば、このような事件を公表するのも、アイドルを守るのも事務所の役割であるはずなのに、被害者本人に公表させた上にその後の対応も疎かにしている。事務所のこのような姿勢も見直していくべきだろう。【横田航大】

2019年の目標

# いろいろなことにチャレンジ

## 国際生＆先生 恒例 新年アンケート

## 3年生 昨年の漢字は「努」

2019年がスタートした。新年の初めということで、皆さんは今年の目標などを考えていることだろう。そこで、新聞部は毎年恒例、国際生と先生に今年の目標や、2018年を振り返ってどのような年だったのか聞いてみた。皆さんにとって、2019年がよい年になりますように。

2018年の漢字に選ばれた「災」。さて、今年はどんな年に？

**Q1. あなたの去年1年間を、漢字1文字で表すと？**

1年生の回答は「新」「楽」「努」といったものが多かった。高校生となって新しい環境に一変したり、新しい友達との出会いがあったりと、新しいことがたくさんあったようだ。

2年は、「楽」「変」「疲」など。英検などの検定合格に向けて頑張ったようだ。また、研修旅行が印象に残っている人もいた。

3年は、「努」「勉」「楽」が多く見られた。進学先や就職先が決まった人や、自分の目標達成のために勉強を頑張った生徒が多かったようだ。

【先生編】（順不同）

・「難」仕事上、様々な難しいことがあったから（中山哲秀先生）
・「激」激動の1年だった（清水先生）
・「焦」ずっと焦っていた（濱辺先生）
・「忙」段々と時間管理が下手になって忙しく感じるようになっていったから（林要昭先生）
・「変」色々と環境が変化したから（西村先生）
・「知」国内、海外ともに様々な場所へ生徒を引率し、生徒たちの頑張りや意外な一面を知ることができた（青野先生）

**Q2. 去年、いちばん頑張ったことを教えてください。**

全学年を通して「勉強」「部活」という回答が多かった。明確な目標に向けて取り組んだ人が多かったようだ。他には1年生は「友達作り」、2年生は「ボランティア」、3年生は「受験」が多かった。それぞれ自分がやるべきことに打ち込むことができたようだ。

【先生編】

・釣り（本田先生）
・文房具のコレクション（中田悟先生）
・学校に慣れること（中田靖弘先生）
・5階までの階段の昇り降り（松原美穂子先生）
・ランニング（小出先生）
・3年文系の生徒の皆さんと政治、経済、国際関係について面接に取り組んだこと（松平先生）

**Q3. 今年の目標を教えてください。**

全生徒を通して「勉強」が一番多かった。他には、1年生は「後悔しないこと」、2年生は「受験」、3年生は「新しい環境に慣れること」という回答が多かった。目標を大きく掲げ、頑張ろうという人が多いようだ。

【先生編】

・増毛（田畑先生）
・スマホに頼りすぎない（大澤先生）
・もっと運動をする（ワン先生）
・痩せる（有沢先生）
・今年も教材探し（豊島先生）
・要るもの、要らないものをしっかりと自己判断（高橋千春先生）

**Q4. 今年はどんな年にしたいですか？**

全学生で「楽しい1年」「いろいろなことにチャレンジ」という回答が多かった。去年の経験をふまえて、より楽しく充実した1年を過ごしてほしい。

【先生編】

・より充実した生き方（作農先生）
・日々健康に過ごしたい（和田先生）
・とにかく多くを吸収することから頑張りたいです（西村先生）
・みんなが幸せになる年（橘川先生）
・来年3月31日をもって退職です。最後の年は「立つ鳥跡を濁さず」にしたいです（林要昭先生）
・笑顔に満ちた明るく健やかな年（青野先生）

【松田穂乃佳】

## ○続・海外特派員通信 積極的に行動してます

吉田涼一郎くん（22H）Fromオーストラリア

毎回好評の、海外留学中の国際英語コース生による「海外特派員通信」。今回は、昨年8月からオーストラリアのヒルズカレッジに留学している吉田涼一郎くん（22H）に伝えてもらう。

ヒルズカレッジの本部校舎の前でポーズをとる吉田君

こんにちは。オーストラリアに留学中の吉田涼一郎です。私が住む街は、シドニー、メルボルンに次ぐオーストラリア第三の都市ブリスベンから車で約1時間のところにあります。すごく田舎で、野生の動物を見ない日はないくらいにたくさんの自然が広がっています。特にカンガルーの親子が家の庭で遊んでいる姿がとても微笑ましいです。

私の通っている学校は、国際高校の姉妹校のヒルズ学園です。学校の敷地内にゴルフコースがあり、プロゴルファーを輩出するようなゴルファーの養成でも有名で、毎日ゴルファーの金の卵達が真面目に練習をしています。そのおかげか世界各国から生徒が集まり、とても国際的な学校です。

授業は自分の好きな教科を勉強するといった大学のような形式です。私は物理、数学、英語、オーストラリアの歴史、ゴルフ、演劇の授業を受けています。どの教科も専門用語が英語なので、そこにとても苦戦しています。その中でも一番大変なのは演劇の授業です。英語で劇をしたり、毎週授業で自分の1週間をストーリーにして発表したりするというものです。最初は英語のストーリーを作るのがとても大変で毎週嫌だと思っていましたが、人のストーリーを聞くと面白くてこれは負けていられないと思い、頑張って作って友達が笑ってくれた時はとても嬉しく、このおかげで自分の中のボキャブラリーの数が増えたといっても過言ではないので、とてもいい練習だと思っています。次に出てきた問題は、劇の中でセリフに強弱をつけたり感情を入れたりするというものです。これはとても難しく今の段階ではまだまだなので、これからもっと頑張って留学を終える頃には習得できるように頑張ります。

どの科目もわからないことだらけでしたが、そこで出会った友達や先生に助けられ、授業についていくことができています。わからないことがあったら、すぐに「ここがわからない」と恥ずかしがらずに言って積極的に授業に参加していくということを私は常に忘れずに行っています。留学したいと思っている人には、これは絶対に重要なことだと思うので、何事も積極的に行動してほしいと思います。

私は、ホストファザーとホストマザーの2人と一緒に生活しています。毎週土曜日にキリスト教の教会に行ったり、息子夫婦の家にパーティーに行ったり、ピクニックに行ったりと、とてもたくさんのところに連れて行ってくれるとても優しいホストファミリーです。また週末は友達と海に行ったり、買い物に行ったりなど、色々なところに遊びに行っています。自分の英語力を伸ばすためにはひたすら喋らなければいけないと思うので、常に自分から話しかけるようにしています。

オーストラリアに留学してもう半年が経ちますが、このような貴重な体験ができるのは先生方や親のおかげなので常に感謝を忘れず、一皮も二皮もむけて日本に帰れるようにこれからも日々精進していきたいと思っています。

## 英語ディベート 全国5位に 本校史上最高の成績獲得

第13回全国高校生英語ディベート大会が12月15・16日、福井県の福井工業大学で開催され、出場した本校のディベートチーム（板谷萌里衣、渋谷柚蘭、武﨑聖悉、奈良風花、付嘉誠、イシャ・ラハット）が64校中で見事5位という過去最高の好成績を獲得した。

全国5位に輝いた本校ディベートチーム＝福井工業大学

今回のテーマは「安楽死」。肯定派と否定派に分かれて英語で議論を戦わせた。3勝2分の4位で予選を通過した本校チームは準々決勝で千葉県の稲毛高校に敗退したが、「態度がすばらしく前向き」なチームに与えられる「飛翔賞」を受賞。さらに、個人として「優秀コンストラクティブスピーカー賞」に渋谷さん（31H）、「優秀アタックスピーカー賞」に付くん（31H）、「優秀サマリースピーカー賞」にイシャさん（21H）がそれぞれ選ばれた。

渋谷さんは目標をはるかに越えた5位という結果に「幸せを感じました。全国の強豪校と試合ができてうれしかった。1試合1試合を楽しむことができました」と満足そうに話した。

チームはこの大会に向け、何度も練習を繰り返してきた。テスト期間中でも、遅くまで学校に残ることも少なくなかったという。そうして改善点を見つけていき、強いチームワークを築くこともできたそうだ。

今回、本校チームが残した全国5位という好成績。それにつながる大きな要因について、渋谷さんは「チーム全員がお互いのために万全の準備をしたこと、チームメイト、先生、両親などのサポートや応援があったこと」と答えた。それらの人達の支えがあって、練習の成果を100%発揮することができたようだ。「携わってくれた全ての方に感謝しています」と話していた。

この活動を経て渋谷さんは、努力、チームワーク、伝わるように話すことの大切さなどを学んだという。今後の目標は「これらの学んだことを様々なところで活かし、立ち止まることなく日々精進していきたい」と話し、「自分をサポートしてくれるすべての人への感謝を忘れずに生きていきたい」と付け加えた。

【前川温美】

## 自分も誰かの力になりたい

### 学生時代

**松浦　海 先生（養護）**

（写真は大学３年生の時、大学祭実行委員のメンバーと。松浦先生は前列右から２人目）

毎年4月、最初の授業で必ず先生からされた質問。「みんなは、平成生まれ？」そして、誰かが答えるのは、「みんな昭和生まれです。」一つ下の学年の早生まれは平成生まれだったので、よく聞かれたのを覚えている。お決まりのやりとりではあるが、毎回複雑な気持ちにさせられた。他にも、世代の狭間になることがあり、『ゆとり世代』と周りからひとくくりにされていた。就職する年には、「いよいよゆとり世代が社会人になるぞ」とニュースになっていた。正直、自分で選んで生まれてきたわけではないのに、年齢を言うだけで少し下に見られているように感じていた。

今では共働き世帯が優勢になっているが、当時は「かぎっ子」は珍しく、クラスに多くて2人いるくらいだった。私は小学校に入った時から家の鍵を持たされていて、帰ったら家に誰もいないのが普通だった。両親は常に仕事優先だったので、帰宅も遅かった。正直、今では考えられないが、小1のときには風邪くらいなら一人で病院に行っていた。基本的に放任主義で、心配された経験はなく、むしろ風邪やケガで病院に行きたいと言うとお金がかかると怒られた。家では、いかに平穏に過ごせるかにエネルギーを消費していた。小3くらいから早く自立したい、早く家を出たいと思っていた。それが子どものころの原動力になっていたと思う。

学校生活では、褒められることもなければ、怒られることもない「その他大勢の一人」というポジションだった。たまに不安と緊張があった。中学生になると、上下関係がかなる時も腰を直角に曲げて挨拶をしなければならなかったし、休憩中に日焼け止めを塗ったり座ったりしている先輩もいた。そんな人間関係が煩わしくて時の保健室の先生に助けられていた。ケガをしたときに心配してくれたりすることが、大きな心の救いになっていた。困ったときに頼りになる大人がいることで、なんとか乗り切ることができたと思う。いろいろ悩んだ経験があったから、自分も誰かの力になりたいと思い、養護教諭をと決めた。

高校生活は、家と学校の往復だった。部活も入らず、ほぼ毎日7限授業と土曜講座を受ける日々だった。卒業したら実家を離れられると思うと、自然と頑張れた。取り組み始めると、受験勉強は苦ではなかった。勉強するうちに少しずつ分かるところが多くなってくると、勉強が面白くなっていた。進学後は、学費も生活費も自分で払いたいと考えていた。しかし、現実は厳しく、第1志望の大学には学力が足りなかった。滑り止めで受かった大学に進学するか、浪人してでも学費の安い国立大学にするか悩んだ。国立なら奨学金とアルバイトを頑張れば、自分でなんとかできそうだったが、あと1年のことを想像すると、耐えられる自信がなかった。親に学費だけは出してもらうことにして、それ以外は自分でなんとかすることにした。

大学生活は、本当に楽しかった。初めての一人暮らし。学校とアルバイトとサークル、何もかもが新鮮だった。

学生時代を振り返って、良いことばかりではなかったが、悪いことばかりでもなかったと思う。人生100年時代、この先、何が起こるか分からない。今できることをやるのみ！

## 「女子高生が世界を変える」

ユネスコ部

### 北陸富山 Blue Earth Project が発足

松蔭高校の生徒からレクチャーを受けるユネスコ部員＝神戸市・松蔭高校

「北陸富山Blue Earth Project」が1月、本校ユネスコ部の女子部員が主体となって発足した。

Blue Earth Projectとは、環境問題を切り口に、女子力を生かして社会を「デザイン」するというプロジェクト型のキャリア教育のことで、10年以上前に神戸市の松蔭高校で生まれた。今では宮城・福島・東京・横浜・名古屋・沖縄の200人以上の女子高生が参加している。本校ユネスコ部は今年度から「北陸富山Blue Earth Project」として、この活動に参加することになった。

今年のBlue Earth Projectのテーマは「プラスチックごみを減らして、生物多様性の危機や地球温暖化を防ごう！」。レジ袋やストローなどのプラスチックごみ削減のための取り組みを企画している。ユネスコ部はコンビニのレジ袋に着目。富山県は平成20年より「レジ袋無料配布禁止」を全国に先駆けて実施し、県民への定着・拡大が話題になった。ユネスコ部部長の廣岡愛波さん（21H）は「主婦の必需品となったエコバッグを子どもや若者などさらに多くの年代層に普及させるため、多くの人にプラスチックごみが及ぼす環境問題についてより深く知ってもらい、エコバッグを富山県民の必須アイテムとすることを目指したい」と語った。企画コンセプトを「第二次エコバッグ革命 ～富山からプラスチックの危険性を社会に広めよう～」とし、今まで何度か行ってきた海岸清掃に加え、富山の海で漂流物とマイクロプラスチックの実態調査や、街頭でエコバッグに関するインタビューを行い、啓発ムービーを作るそうだ。毎年行っている「服のチカラプロジェクト」と同時期に大きいサイズの衣類の回収も呼びかけ、集まった服でエコバッグを作るイベントを2月24日に神戸で開催することが決まっている。

【松田穂乃佳】

## 部説 悪質な「あおり運転」 ～思いやり持った安全運転を～

昨年7月、大阪府の堺市である男性がバイクに対する乗用車の「あおり運転」をした後に追突し、バイクを運転していた男子大学生を死亡させたという事件が起こった。この事件の初公判が、今月15日に大阪地裁堺支部で開かれた。検察側の冒頭陳述によると、被告が前照灯をハイビームにしてクラクションを鳴らしつつ時速約70キロで走行。バイクが車線変更をすると被告も車線変更し、時速約100キロで一気に距離を詰め、バイクが緩くブレーキをかけた直後に追突したとされる。

弁護側は「被害者に立腹して追跡したが、故意に衝突していない」と主張した。しかしその後、証拠調べで再生された被告のドライブレコーダーの映像には、衝突直後に「はい終わり」という音声が残されていたという。

「あおり運転」は、神奈川県の東名高速道路での夫婦死亡事故などをきっかけに社会問題化した。今回起こった事件のように、「あおり運転」に殺人罪を適用しようというのは異例のことだ。公判では主に、「あおり運転」をめぐる「殺意」の認定が焦点となるが、それを客観的に証明するのは難しい。そのため、「あおり運転」の摘発にはドライブレコーダーの映像が立証の鍵となることが多く、ドライブレコーダーの出荷台数も急増するなど、ドライバーの意識の向上がうかがえる。

警察庁によると、高速道路で前方の車との車間距離を詰め過ぎたなどとして、全国の警察が昨年1～6月に道交法違反の車間距離不保持で摘発した件数は6130件に上り、一昨年同期の3057件から倍増したことがわかった。社会問題化した「あおり運転」に対する取り締まりの強化が影響したとみられる。この傾向は今後も続いていくだろう。

最近、アンガーマネジメント（怒りの感情と上手に付き合うための心理トレーニング）の普及を行う一般社団法人「日本アンガーマネジメント協会」が、2019年に向けて「新・あおり運転（ロードレイジ）撲滅プロジェクト」を発表した。同協会では、より多くの人々に「あおり運転」の危険性に対して関心を持ってもらい、感情をコントロールすることで世の中から一つでもそのような運転がなくなることを目指している。

現在は、18歳から自動車運転免許を取得することが可能である。高校生の私たちにとっても決して他人ごとではない。「あおり運転」の被害者にも加害者にもならないために、余裕を持った運転計画を立てるなど、普段からゆとりある運転を心がける必要があるのではないだろうか。

富山県は土地柄、全国でもトップクラスで車を利用する人が多い。私たちのほとんどが、将来車を運転して、会社に通勤したり遊びに出かけたりすることになるはずだ。数年後に車を運転する際は、自分を含め大切な人を乗せているという緊張感を常に持ち、安全な運転を心がけたい。それと同時に、歩行者や他の車を運転する人々への「思いやり」が重要になる。全ドライバーの安全運転への意識がもっと高まり、事故の数が減ることを願う。

【松田穂乃佳】

## 諸橋先生にベビーご誕生

諸橋未来先生（養護）に11月3日、第一子が誕生した。身長47cm、体重2880gのかわいい女の子で、名前は樹（いつき）ちゃん。「地面にしっかり根をはって、ゆっくり着実に大きく育ってほしい」という願いから名付けた。

逆子だったため帝王切開による出産だったが、「後産」がかなり痛み、麻酔の後遺症も長く続いて大変だったそうだ。

樹ちゃんは、最近は表情も豊かになり、喃語（あー、うーなど）で少しおしゃべりするようになった。「母は相変わらず睡眠不足でくたびれています」と笑う諸橋先生は「自分の目で見て自分の頭で考えて行動できる人、自分も他人も愛する人になってほしいです」と話していた。

樹（いつき）ちゃん